

方已御座

ばん

や

もひま

御座

第

1

回

Kohda Main
幸田真音

イラスト◆小野利明

序章◆偏流

最初から、予感めいたものがなかったわけではない。

遠くからじわじわと、姿なきなにかがすぐ近くまで迫っている。つかみどころのない、得体の知れない存在ながら、途轍もなく巨大な渦の気配だ。容赦なくこちらを巻き込んで、はるかどこかに連れていかれてしまいそうな、抗い難い強烈な力――。

その朝一番、敬三はそんな息苦しさにも似た感覚に襲われ、勢いよく庭に降り立った。

途端に、沓脱石に置かれた杉下駄を通して、素足に冷気があがつてくる。今日から、はや三月。目を凝らせば、この広すぎるほどの庭の

あちこちに春の気配がいくつも見つかるはずなのに、身震いするほどの寒さだ。

思わず首をすぼめ、長年着慣れた紬の袴の袴元を掻き合わせたか、すぐに思い直して、敬三は精一杯に背筋を伸ばした。二度、三度と、胸の底まで息を吸い込んでみる。鼻腔から氣道を伝って、冷たい空気が通っていくのがわかる。肺のなかが清冽なもので満たされ、身体中の細胞が一列ずつ生まれ変わるような気がしてくる。

東京は三田綱町にあるこの屋敷は、世間の常識からはいささかかけ離れた広大なものだ。明治三十九年（一九〇六）、敬三がまだ十歳のころ、父の洪沢篤二が一家を住まわせるために見つけたものだといっている。敬三たち兄弟が生まれながらに住んでいた深川界限では、当時は大雨のたびに何度も浸水に悩まされた。それだけでなく、東京中を震撼させたペストが蔓延し始めていたころのことでもあった。

なにを置いてもその猛威を避け、一族の生命を守る最善の策だと、



父は一家全員を引き連れて、深川からの転居を決断したという。

もつとも、この途方もない広さの屋敷である。深川の家屋を一部移築しただけで済まず、あれこれ工夫を凝らした新邸が完成するまでには、結局ほぼ四年も待たなければならなくて、その間、一旦は三田小川町の仮住まいで我慢を強いられたのだが。

洪沢家の大所帯ぶりといえば、他に類をみないだろう。といつても、みながみな血縁家族というわけではない。同居の親戚縁者ももちろん少なくないが、家の内外を見る庭師や下働きの者、家事全般を切り盛

りする女中たちに加えて、子供たち一人ずつにそれぞれ専属の女中がついており、昼夜を問わず世話をしてくれている。

さらには敬三自身が率いる同人の研究者や書生たち——それらがみな不思議な和をなして、生活をともにしているのがこの洪沢家だ。自由にかつ伸び伸びと、思い思いに日々を暮らすある種のコミュニニティを形成している、とても言えはいいだろうか。

大所帯のわりには屋敷はいつもしんと静まりかえっていた。世間から一歩奥まったような別世界の静けさだ。それだけ屋敷が広がったか

万、已むを得ず

らでもあるが、人間たちだけでなく、遠く木立からは鳥の声が聞こえ、庭をわたる風が爽やかなこの屋敷を、そしてここにある季節ごとのなよりの「自然」を、敬三はこよなく慈しんできた。

それが一変したのは三月ほど前のことだ。

昭和十六年（一九四一）の十二月八日。日本がついに大東亜戦争に踏み込んでしまった日を境に、屋敷の様子も洪沢家の暮らしぶりも激変した。

思えばあの日の夜、洪沢家を担う家長として、敬三はこの家に暮らす一同を、一人残らず茶の間の神棚の前に集めた。みずから直立の姿勢を保ち、開戦を伝える詔勅を読み上げたあの瞬間から、なにもかもが変わってしまった。いや、変わらざるを得なかった。

陽の光を存分に浴び、季節ごとに隅々まで人の手がいっぱいだった樹々を背景にして、あんなに青々と艶やかだった芝生はすべて剥がされてしまった。四方を洒落た金網で囲まれ、英国製のベンチをゆったりと配したあのお気に入りだったテニスコートも、すっかり掘り起こされて、もはや見る影もない。

あそこはまだテニスコートがあったころが、いまは限りなく懐かしい。子供たちがみな「原っぱ」と呼んで遊んだ小さな滝のある庭の一部を潰して、待望のテニスコートができあがったとき、敬三は真っ白なズボンに英国で買求めた濃い緑のジャケットを羽織って、のんびりとベンチに座ったものだった。

無邪気で眩しいばかりのテニスコートのかわりに、いまは見渡すかぎり黒々とした土の畝が整然と連なり、馬鈴薯やホウレン草や胡瓜などが、早春の陽射しを浴びて遠慮がちに若芽を伸ばし始めている。山羊や鶏の姿も見える。

そうだ。いまは非常時。

極端な食糧不足に陥ってしまったこの国の戦時体制のもとで、人並みはずれた大家族の胃袋を満たすため、ここを全部畑に替えることに迷いはなかった。

あの日以来、屋敷に暮らす男どもは着物も洋服も脱ぎ捨てて、カーキ色の国民服を着込み、ゲートルを巻いた足に地下足袋という格好になった。もちろん一家の女子たちも、娘たちや女中の別なく、全員が紺紵のモンペ姿である。

決して華美ではなかったものの、限りなく豊かだった暮らしは、取りも直さず偉大な祖父栄一の功績にほかならない。その豊かさゆえに、穏やかで、思慮深さを湛えていた洪沢家の静寂がいまはなにより恋しい。妻の登喜子が毎日のように弾いていたピアノの音はいつしか途絶え、どこからか流れてくるのは、あまりに無粋なラジオの音楽だ。虚しくも威勢のよい軍艦マーチによって、敬三がこよなく慈しんできたものたちが、いとも易々と、そして無残にも奪われてしまった――。

もう一度、一面の畑と化した庭に目をやってから、敬三は気持ちを振り払うように頭を振り、両手を思い切りあげて大きく伸びをした。そして、両手でおもむろに自分の頬をばんばんと二度叩いて、覚悟を決めたようにまた廊下に戻ったのである。

さて、洋間に行くとするか。いつまでも客人を待たすわけにもいくまい。

一見穏やかだが、眼光の鋭いあの顔が浮かんできてくる。今朝の客は山下亀三郎だ。招かれざる相手とはいえ、朝一番にやって来たのは、仮にも山下汽船（新日本汽船、ジャパンラインなど）の合併を経て、現

在は商船三井の社長なのである。山下財閥の創始者であり、「海運王」としての誉れも高い経済界の重鎮だ。

用向きはおおよそ見当がついた。またなにか頼んでくるのだろう。頼むというより、けしかけてくると言ったほうがよいかもしれない。敬三のことをあれこれ気にかけてくれているのはよくわかる。それはそれでありがたく思うべきなのだろうが、なにかといえれば外へ外へと引つ張り出そうとする。こちらはそんなことなど望んでもいないのに、あの手この手で、敬三をやたらと社会の表舞台に立たせようとする。静まりかえった廊下を歩きながら、敬三は再度意識して胸を張った。なんにせよ、どうせ断ることになるのだ。話を聞くまでもない。といえ三十歳近くも年上で、無下にはできぬ相手。殊勝な顔でひとますは話を聞くのが礼儀というものだ。

昨年から、敬三自身が副頭取に就いたばかりのわが第一銀行にとつて、大口融資先の総帥でもある。そもそまがいまは亡き祖父渋沢栄一とは深い縁のある人物なのだから。

それにしても、儀を重んじるあの方にしては、なんの前触れもなく、しかもこんな朝早くにひよいと訪ねて来られるなど珍しい。よほどの話があるのだろうか。敬三は長い廊下を行く足を早めた。

女中や子供たちが「お廊下」と呼ぶこの長い通路は、和洋折衷様式とでも言うべきか。三田の屋敷の半分を、思い切つてこの英国風の洋館に建て替えたのはいまから十二年前、昭和五年（一九三〇）のこと。敬三が三十四歳になろうという年で、一月末に待望の長女紀子が生まれたばかりだったのでよく覚えている。

門から続く道のまわりにはびっしりと芝生を敷き詰め、心地よい木陰ができるよう配置にこだわって櫺の木立を植えさせたのは、妻の登喜子の好みだった。建物全体を重厚な石造りにし、化粧煉瓦を散らし

た石造りのテラスも設えて、格調高く紫がかった濃いグレーのスレート葺き屋根に決めたのも、すべては、無邪気で楽しかった新婚時代の英国暮らしを思い出していることだ。

登喜子の好みは、建物の内装にも随所に生かされている。当時はまだ珍しかった白くて高い漆喰の天井と、中央に下げた大きなシャンデリア。高窓に配したステンドグラスも、朝日の差し込む角度をあれこれ考慮して、念入りに選んだものだ。

同じ英国調の落ち着いた壁紙の色合いは、重厚なチーク材の柱とも見事に調和して、敷地のあと半分に建っている日本家屋とも不思議なほどじっくりと馴染んだのは、登喜子の趣味の良さゆえだったのだろう。

「おはようございます。大変お待たせいたしました」

廊下の奥まで行つて応接室の前に立ち、敬三は笑顔を作つて、木彫のドアをおもむろに開けた。

すると、敬三の顔を見るや、山下は、正面のソファから弾かれたように立ち上がった。待ちかねていたという顔つきだ。鍛え抜いた細身の体軀といい、身のこなしといい、七十四歳とは思えぬ敏捷さである。

「朝早くからすまぬな。このあと人に会わねばならんのだが、その前にどうしても君に伝えておきたいことがあつて」

朝の挨拶もなにもすつとぼして、山下はすぐに用件に入る気だ。なにが起きているのかわからないが、これはよくよくのことらしい。いつも穏やかな山下が、これほど慌てた様子を見せるとは。

「まあ、ひとまずはお座りになって」

あまりの勢いにいささかたじろぎながら、だからこそこちらは落ち着かねばと敬三は思った。こういうときこそ、迂闊に相手の調子に呑まれては、とんでもないことを引き受けてしまいかねない。

万、已むを得ず

「なんだ、お茶も出しておりませんでしたか。失礼いたしました。このところ、なにもかも切らしてあります」

なにも置かれていないテーブルに目をやって、敬三はあえてゆっくりと話を逸らした。さすがに決まり悪そうにソファに座りなおした山下は、だが、女中を呼ぶため手を叩こうとする敬三をすくりに制してくる。

「いや、かまわんでくれ。話だけ済んだらすぐに行かなきゃならんだよ。そんなことより、ほかでもない。今朝来たのは、君にぜひとも引き受けてもらいたいことがあってな」

ソファから半身を乗り出して、山下はじつとこちらの目を見つめてくる。とにかくこれだけは伝えたい、なにがなんでも承諾をもちとって帰る。そんな有無を言わせぬ山下の押しの強さが、その目に溢れている。

「はあ……」

「またですか、と喉元まで出かかった言葉を呑み下し、そのかわりわざとらしいほど、興味のない声を出した。ついこの前も、北支那開発に関われと言ってきたばかりではないか。いきなりそんなことを言われても、はいそうですかと引き受けられるわけがない。

いや、そればかりではない。数えたらきりがないほど、この山下は次々と懲りずに新しい仕事を勧めてくる。いまのうちに、臆せずいろいろなことをやっておけ、それが敬三のためでもあり、渋沢家のためでもあると言いたいらしい。

「なあ、敬三君。いま、日本銀行の副総裁のなり手を探しておるのは知っているだろう。深井英五さんのあとを継いで、あの池田成彬さんが総裁に就いていたのはもちろん君も知っているよな？」

三井合名会社の筆頭常務理事として、三井財閥の大部分を率いていた財界実力者の池田成彬が、時の首相である近衛文麿に強く請われ、

満を持して第十四代日銀総裁に就いたのは五年前のことだ。

「あのときは病のためだからやむを得なかったんだが、惜しいことに五カ月でお辞めになるほかなかった。だからこそ、余計に損得抜きで思われるんだろうな。実際になかに入ってみて、日本銀行というのをじっくり観察されてこそのことだね」

山下の口から迸るように繰り出される言葉を、敬三は固く唇を閉ざしたまま、聞いていた。

「だからこそだよ、なあ敬三君。池田さんは心底思われたんだろう。あそこは頗る優秀な連中の集まりだが、いや、そのことは間違いないんだが、それだけに頭がガチガチの人間ばかりでな。こういう時代にはそれではかえってだめなんだ。この際もつと外からまったく新しい人を入れないと、あの組織はどうしようもない、とな」

「そのことが、私とどういう？」

池田や山下の憂いは理解できるが、所詮は「官」の世界の話だ。自分には直接は関わりがない。

「そこでなんだ。ぜひとも君をと、強く推す声があがっている」

「まさか……」

半分笑みさえ浮かべて、敬三は手を振った。あまりに唐突。あり得ない話だからだ。だが、さらに身を乗り出して、山下は畳み掛けてくる。「池田さんだけじゃないよ。それに、外の人間だったら誰でもいいというわけでも、もちろんない」

どうしても君が必要なのだ、首に縄をかけてでも引き連れていくと言わんばかりの勢いである。みなまで聞き終える前に、敬三は何度も首を振って見せる。

「滅相もない」

おのずと声も大きくなった。なけなしの紅茶を淹れて持ってきた女中が、半開きのドアの前で立ち竦んでいる。敬三が大きな声を出すところなど、見たことがないのだから当然だった。

「引き受けてくれるよね」

山下は、一歩も引かぬとばかりに敬三を見つめ返してくる。

「無理ですよ。そもそも山下さんが一番よくご存じでしょう？ 私は去年の暮れにうちの銀行の副頭取になったばかりです。まだ三月ほどしか経っていません」

「それは重々承知のうえだ」

「でしたら、あり得ませんよね。百歩譲って、仮にですよ。万が一私が承知したとしても、うちの銀行の連中が首を縦に振るはずがありません」

「しかしな、いまは非常時だ。お国のためなんだ。どうしても君になつてもらいたい」

非常時なのはこっちだって百も承知だ。この先、戦況がどう転んでいこうと、政府には金が必要になる。戦争を続ける限り、資金確保は急務だ。大蔵省の出す戦時国債を、日銀が引き受けて、うまく消化していかない限り、やがて政府はにっちもさっちも行かぬことになる。

だからこそ日銀は、政府と連携して、そのあたりの舵取りをいまい上に求められる。簡単な仕事ではない。いや、困難を極める調整役だ。誰にでも、おいそれとできる仕事ではない。

「いくらおっしゃっていただいても、私にはとても……」

ここは、しっかりとこちらの気持ちを断言しておく必要がある。

「お引き受けることはできませんので」

だからきっぱりとそう伝えた。

「悪いが時間がない。もう私は行かないと」

だが、まるで聞こえなかった素振り、山下はソファから立ち上がった。押し問答というところまでもいかなかった。まったく聞く耳を持たぬのだ。山下は、仕立ての良さそうな三揃いのチョッキのポケットから、わざとらしく懐中時計を取り出して一瞥し、そそくさとドアを開けて廊下に出た。

「あ、そうそう、さっき部屋まで案内してくれた女中に聞いたよ」

数歩行つたところで、思い出したように山下が言う。

「驚いたねえ。君が畑をやってるんだって？」

なんのことかと思つたが、庭がすっかり野菜畑と化したことを言っているのだ。その声に敬三への同情的な響きが感じられる。

「いえ、あれは……お恥ずかしい次第です」

こめかみのあたりを掻きながらはにかんでみせたが、山下は遠く庭を見たままだった。

土いじりも存外面白いものですよと、喉元まで出かかった。蒔いた種が愛らしい芽を出したと喜んだり、工夫された農具の便利さにあらためて瞠目したり、副頭取室で机に向かつているよりも、よほど自分に向いている。だが、そんな本音を漏らしたところで、山下の耳には届かないだろう。

「この屋敷だけは、昔のままできてほしかったがなあ。まあ、これもご時世なんだが」

以前の庭をひどく惜しむ声だ。もつともその横顔は、言葉ほどには嘆いているふうでもない。そして、「また来る」とだけ言い置いて、玄関まで見送るといふ敬三を手で制し、すたすたと去っていったのである。

あれだけはっきりと固辞したのに、話はそれでは終わらなかった。というより、こちらの思惑などかまわず、事態はどんどん進んでいく。

万、已むを得ず

山下が次にやってきたのは三日後の三月四日。さすがに個人的な辞退ぐらいでは事が収めきれない気配を感じ、翌朝一番で第一銀行に出社したとき、叔父であり頭取でもある明石照男に相談を持ちかけた。

「あり得ない話だよ。あの人たち、なにを考えているんだか」

案の定、明石は怒りすら口にする。

「うちの銀行としても、いま敬三さんを差し出すことなど、できるはずがない」

「その前に、僕自身が、引き受けるつもりなんか毛頭ありませんよ」

「敬三さんには、腰を据えて頑張ってもらわないと。やがては、第一銀行の頭取に就いていただかなければいけない方なのですから」

明石の望みどおり頭取になるかどうかは別として、敬三はあくまで「民」の側に身を置いていたい。いくら請われても「官」に入るなど、まずあの祖父栄一が望んでいない。

「ただし、相手は日銀ですからね。断るにしても慎重にやらないと」

金融業界の一員として、無用な禍根を残すことだけは避けなければならぬ。第一銀行内でも常務連中を加えて対応策を練り、五日のうちい時の大蔵大臣・賀屋興宣を訪ねることになった。

「山内さんがね、気の毒だが、どうも良くないんだ。だから君には、なんとしても、できるだけ早く日銀に来てもらいたい」

賀屋はにこりともせず言う。日銀副総裁の山内静吾が胃潰瘍で倒れ、余命幾許もないと医師に告げられたらしい。だから、敬三が断るといふ展開などあり得ないのだという。

「とんでもないお話です。私なんか、そんな資格もなければ、能力もありません。第一銀行で精一杯に勤めあげて、生涯を終えていく所存です。お断りいたします」

意を尽くして伝えたつもりだったが、話は端から平行線だった。仕方なくすぐに第一銀行に取って返し、また善後策を立て直す。

六日、七日、八日と、連日各所を駆け回ったのも、とにかく免れたかったからだ。話の発端らしい池田成彬にも会い、佐々木勇之助にも助けを求めた。佐々木は、祖父洪沢栄一の時代から陰になり日向にない自分を支えてくれ、いまは第一銀行の実務を一手に取り仕切ってくれている。

いくら請われても、引き受けるつもりにはなれなかった。第一銀行の重役連中も一丸となって、断るために抵抗した。九日と十一日にも、多忙な賀屋大蔵大臣に面談を求め、失礼のないように極力配慮はしたものの、ダメ押しのもりで再度断りの返事をした。

そうしたら、ついに翌十二日の早朝、時の総理大臣から呼び出しがかかったのである。

総理大臣執務室に一步足を踏み入れたとき、敬三をめぐってカッと熱風が吹き付けてくるようで、全身から汗が噴き出すのを感じた。

外とはまるで違った空気。いや、実際に二、三度ぐらい温度が違うのではないかと思うほど、部屋を満たす猛烈な熱気がある。思えば祖父の栄一に随行して、若いころから国の要人とはさまざまなどころで会ったものだ。宮城で陛下に拝謁し、御陪食の席も経験した。だが、いまこの部屋を満たすものは、そのどれともまるで違う。

これだったのか。

これが、あの朝わけもなく自分を襲ってきた渦の正体か。

敬三は心して、正面からじつと自分を見据えている人物と対峙した。見たところ決して大柄ではない。むしろ拍子抜けするほどに華奢な

身体つきだ。つるりと禿げ上がった頭に、手入れの行き届いた口髭。丸眼鏡の奥の眼にも、いまはさほど鋭さは感じられず、むしろ穏やかさを湛えて、好意的に自分を迎えてくれている。だが、逆るようなこの威厳はなんなのだ。

「そうか。君が渋沢敬三君か。よく来られた」

どこか晴れ晴れとした声音だった。左の胸に所狭しと勲章を下げた国防色の詰襟姿でなければ、温厚な一人の初老の男に過ぎないのかもしれない。だが、おもむろに椅子から立ち上がったとき、あたりを制するような金属音がした。

椅子を引く音ではない。目の前の総理大臣・東條英機が腰に下げているサーベルが、その存在を誇示するように立てる音だ。敬三はハッとして、東條の全身を見つめ直した。この部屋の異様なまでの熱気の源がやつとわかった気がしたからだ。

軍人という存在。国を背負って他国に立ち向かう、戦争という極限の昂揚が、まごうことなき現実となつて敬三に迫ってきたからである。耳の奥に、昨夜遅く明石から伝えられた言葉が蘇ってくる。

——明朝一番で、東條総理にお会いいただきます。

絞り出すような声だった。

——すべてはお国のため、国民の暮らしのためですから。

敬三の日銀への転出を、第一銀行頭取として、本人に勝るほどにあれだけ強く反対していたあの明石照男が、賀屋蔵相の説得について屈したという報告は、そのまま敬三の決意と重なった。

「頼みますよ、渋沢副総裁」

東條の短い言葉が、肚の奥深くに沁みていく。明日から、戦時下のこの国の金融政策をなんとしても支えなければならぬ。あらためて、

敬三の覚悟が決まった瞬間だった。

「はい。昨夜遅くでしたが、謹んでお引き受けすることにいたしました」自分の口から発した言葉が、他人の声のように耳に突き刺さる。

東條との短い面談を終え、執務室から出た瞬間から、背中を追い立てられるような目まぐるしい日々が始まった。

あらためて第一銀行に戻って役員会を開き、一部始終の報告をしたあと、昼食を摂るのもそこそこに、午後からは日銀総裁・結城豊太郎に挨拶にも行った。

そして二日後の三月十四日には、日本銀行副総裁の正式な辞令を受け取ることになる。まるで、敬三の気持ちが変わらないようにと、釘を刺すかのごとき顛末だった。

望むと望まざるとに拘らず、思いがけない力によって、人生の流れが大きく変わることがある。だが、引き受けたのはほかでもない。決めたのはこの自分だ。流されたわけではない。むしろみずから踏み込んだのだ。

そして、引き受けた限りは、中途半端は許されない。なにがあつても、どれほど不本意であっても、死力を尽くすのが渋沢敬三の生き方である。

〈従四位子 爵 澁澤敬三〉

日本銀行副総裁被仰付

昭和十七年三月十四日

内閣

黒々と墨の跡も鮮やかな辞令。大きく「内閣」と認められた文字を見ながら、敬三はずしりとしたその重みを味わっていた。三月一日の朝、あの山下亀三郎がやって来てから、わずか二週間の出来事だった。

(つづく)